

## ● 最優秀賞

# 豊かな学びを育む総合学習・総合活動を目指して

長野県伊那市立伊那小学校 伊藤道彦<sup>いとうみちひこ</sup>

## 1 はじめに

### (1) 本校の教育を支える考え方

『児童の教育は、児童にたちかえり児童によって児童のうちに建設されなくてはならない。そこからではない。うちからである。』『教育は、児童の生活をよそにくわだてられるべきではない。児童の生活を、もとむるころを、それを中心にしてそこに構成され創造されていくべきものである。』<sup>①</sup> これは今から80年あまり前、信州教育の礎を築かれた淀川茂重先生が、自身の教育実践をまとめた『途上』という本の中で述べた言葉である。

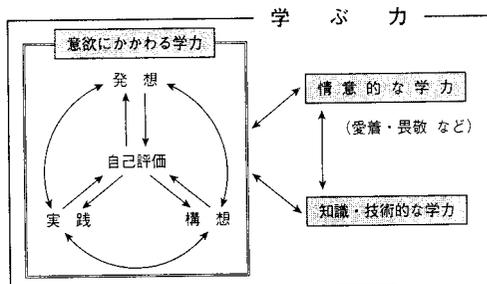
本校は、この考えに立って、子どもの学びの道すじを保障し、子どもの求めや願いに寄り添って、子どもと教師が創り出す総合学習(1・2年)・総合活動(3～6年)を教育課程の柱にしている。それを支えているのは、「子どもは本来、自ら求め、追究し、自分で自分を作り、育ち、成長する力を持っている存在である」という子ども観であり、「子どもの事実から子どもに学ぶ」教師の姿勢である。

### (2) 「内から育つ」子どもを育てていく学ぶ力

本校は「内から育つ」を研究テーマにして14年目、総合学習・総合活動に取り組んで20数年になる。それは、子どもたちに「豊かな学びを育みたい」「内から育つ子どもを育てていく学ぶ力をつけたい」と考えてきているからである。本校では、この「学ぶ力」を「意欲にかかわる学力」「情意的な学力」「知識・技能的学力」の3つの学力の総体とら

えている。この3つの学力は、お互いに働き合ってより大きくなっていく。特に「意欲にかかわる学力」が、子どもにとって人間性を豊かにし自立への道を拓き、人間としてよりよく生きようとする力につながると考えている。言い換えれば、子どもがその知・情・意・体の全体を働かせて、ものやことの本質を追究していく力であり、これが「学ぶ力」の中核である。

こうした学ぶ力を、一人ひとりの子どもに育むことが「内から育つ」子どもを育むことになると考え、総合学習・総合活動に取り組んでいる。



## 2 本校の教育の柱をなす総合学習・総合活動

### (1) 子どもと教師が創り出す総合学習・総合活動

学習指導要領第一章総則の冒頭部分に以下のような記述がなされている。

「各学校においては……児童の人間として調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童の心身の発達段階や特性を十分考

慮して、適切な教育課程を編成するものとする。学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力を育むことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、……個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」

本校では、学校は各学級の連合体であり「各学校において」は「各学級において」と考え、各学級で教育課程を編成している。その教育課程を総合学習・総合活動中心に編成しているのは、子どもたちに「豊かな学びを育みたい」という願いからである。総合学習・総合活動は、淀川先生の教えである子どもの生活（求めや願い）を中心に据えた学習活動であり、また一つの学習活動の中にいくつかの教科内容等が含まれている学習活動である。

## (2)「豊かな学びを育む」総合学習・総合活動

総合学習・総合活動が「豊かな学びを育む」と考える理由は、主に次の四点である。

- ①総合学習は体験による学習を重視し、思考と行動が一体化している低学年の子どもたちの発達段階を考えての教育課程だからである。
- ②総合学習・総合活動は、子どもたちが、「発想—構想—実践—自己評価」をしながら学んでいくという子どもの学びの道すじに添った学習を大切にしているからである。
- ③具体的な自然や社会、人を学習対象にし、具体的に触れることを通して「すごいな」「驚いた」「楽しいな」「なぜだろう」という思いが自ずから育つことを大切にしている。これらの感性の育ちは、子どもたちの心に、自然や社会、人に対する畏敬の念が育まれていく学習と考えている。
- ④学力の定着を図る、数や言葉の学習等で、単なる繰り返し学習ではなく、意味を持った練習学習ができるからである。総合学習・総合活動が「豊かな学びを育

む」ためには題材選定が重要になる。子どもたちが会う様々な「もの・こと・人」は、すべて学習のたね（素材）であり、この学習のたねに接触することによって開始される素朴な行為やそこにはたらく心が「学習の芽」であると考えられる。この「学習の芽」が「学習」となる可能性をもつものであるかどうか、徹底した素材研究を行う。その素材が学習や追究する価値があるかどうかを吟味する。

## 3 | 5年冬組「<sup>しらけ</sup>白毛もち米作り」の実践より

### (1)「白毛もち米作り」を中核にすえた年間学習計画の立案

#### ア 題材の立ち上がり

4年時に、長野社会見学で歴史館を見学したことから古代に興味を持ち、竪穴式住居を造り火起こしや縄文クッキー作りなどを行ってきた子どもたちは、5年生になり、住居の横の5アールあまりの畑について「畑の方まで昔を広げたい。」「昔の人の家のそばだから、昔のお米を作りたい。」と考えた。さっそく赤米や黒米などを調べたり黒米で炊いたお赤飯を持ってきて食べたりした。そうしたなか、宏美が「白毛もち米というおいしいけれど背が高く作りにくい昔のお米がある」とみんなに紹介した。話し合っていくなかで、教師は白毛もち米の稲穂と白毛餅を子どもたちに提示した。絶滅しそうな米であることや、焼いて食べた白毛餅がとても甘くておいしかったことなどから、子どもたちは「このお米にチャレンジしてみたいです」と白毛もち米作りを決めていった。

#### イ 題材を決め出す上で重要な素材研究

教師は、4年時に古代にかかわる活動をしてきた子どもたちが、5年生になったら古代米に目が向くことは予想がついた。では古代米作りを通して子どもたちはどんな活動をし、何を学んでいくのだろうか。5年生の教科と

の関連も含めて素材の価値を検討すること、すなわち素材研究を大切にしたい。教師は、子どもたちよりも一歩先を歩いていくことが必要である。赤米か黒米か、それとも白毛もち米か。ウエビングも作ってみる。下の囲みは「白毛もち米」についての素材研究の一端である。このように材そのものについて調べていくと「白毛もち米の絶滅の危機の理由」「地域が限定されて（三峰川沿岸等の田の水口）に作られた背景」など5年生の子どもが疑問をもつであろうことが見えてくる。「菓匠しみずや亀まんで白毛もち米を使っているのはなぜ？」という疑問から、人との出会い、その人の生き様にも触れられそうである。また「自分たちのすむ上伊那にしかなく、絶滅の危機にあることを知れば、子どもたちは挑戦してみようと思えるだろう。」「もち米は収穫後、餅つきや鏡餅作り、お赤飯等々、多くの活動の展開が期待できる。」など学習の構想も描くことができる。こうして教師は白毛もち米という意見を支えようと考え、白毛もち米の稲穂や白毛餅を提示したのである。

**白毛もち米の素材研究**（実際はもっと詳しく多岐に渡る）

- ①おいしい(甘みが強く、香りがあり、粘り気がある)
- ②在来種で古代米と考えられている。
- ③上伊那にしか栽培されていない。
- ④背丈が高い(1m50cm) ⑤絶滅しそうである。
- ⑥昔は田んぼの水口に作られていた。
- ⑦三峰川などの沿岸で作られていた。
- ⑧現在白毛もち米を守ろうとしている方がいる。
- ⑨収穫量はあまり多くない。
- ⑩もみに芒(のぎ)といわれる3~5cmの白い毛があり、名前の由来となっている。
- ⑪菓匠しみずや亀まんで和菓子に使われている。
- ⑫古代米かどうかのDNA鑑定を、静岡大学の佐藤洋一郎先生が行っている……

**ウ 学級年間学習計画の立案**

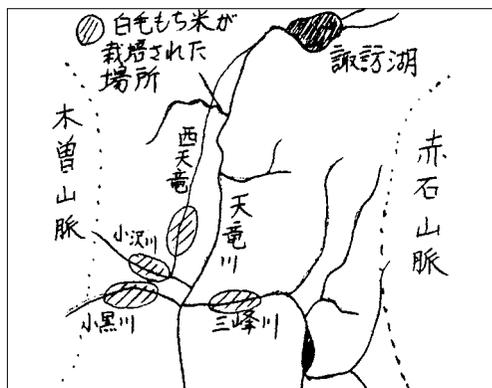
題材が「白毛もち米作り」に決まり、次に

1年間の活動や追究を構想し、計画を立てていく。また総合活動にかかわる教科学習も加えていく。このとき、素材研究が生きてくるのである。こうして年間学習計画ができあがるが、学習の実際のなかで絶えず見直され、加除修正されていく。学習が子どもの求めや願いに添って展開されていくので、計画した通りにやらなければならないというものではない。

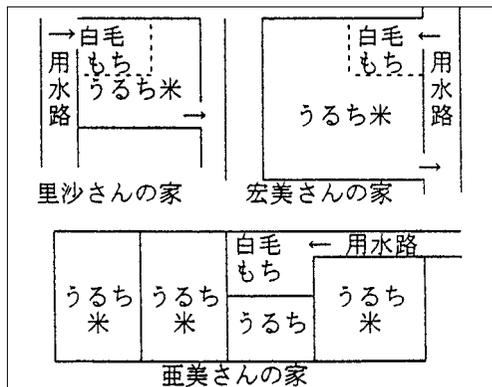
**(2) 実際の子どもたちの学びの姿から**

**ア どうして天竜川沿いでは作られなかったんだろう。～白毛もち米の特性に気づく～**

白毛もち米を作ることになった子どもたちは、もっと白毛もち米のことを知りたい、という願いを持ち、インターネットで調べたりお家の方に話を聞いたりしてきた。すると、



●資料1 / 60年程前の白毛もち米栽培分布図



●資料2 / 白毛もち米の田んぼ

白毛もち米は、地元上伊那の、三峰川・小沢川・小黒川沿岸で栽培されていたこと、しかも、その田んぼの水口に作られていたことが分かった。上伊那で昔から米作りが盛んに行われていたのは天竜川沿いであったことを4年時に学習していた子どもたちは「白毛もち米は、どうして天竜川沿いではなく、三峰川や小沢川、小黒川沿いの田んぼの水口で作られたのだろう。」と疑問を持った。

「諏訪湖から流れてくる天竜川は、いっぱい水がたまって、日光の温かさを受けている。「もち米は、冷たくても温かくても作れる。「うるち米は温かくなちゃいけないから。「入ってきた冷たい水を白毛もち米の方で温めて、うるち米の方に温かい水を入れるようにしたんだと思います。」

「白毛もち米は、うるち米のカバー。うるち米は温かくなちゃいけなくて、白毛もち米は冷たくてもいいから、冷たい水口のところに作った」……

子どもたちは、栽培分布図や水口で作られていた事実に出会ったことで、米作りの大切な要素である水温に目を向けることができた。そして「冷たい水に強い白毛もち米」という白毛もち米の持つ特性を一つ理解した。また、そこにはうるち米の青立ちを防ぐために、白毛もち米を水口に植えた先人の知恵が隠されていることにも気づいていった。話し合いを終えて書いた友梨の感想(資料3)からは、先人の知恵に触れて、農家の方の苦労や工夫に思いを寄せていることが分かる。そして、それを学んだことで自分たちの白毛もち米作りへの意欲をさらにふくらませているのである。

たけど、今も白毛もちを作っている人は、(り)さちゃんやてるみちゃんたちが描いた図のように白毛もちを作っているのた"ろうか? とうめ、考え出した農家の人たちは、とうめ、考え出したのた"ろうか? 本などに書いてあったのた"ろうか? (頭がい)のような気がした。(も)しかしたら実験とかもしたのかなあ。た"けど、きっと私たちの知らない苦労でも、いろいろ苦労があったんだ。私たちが"かんは"らな"さ"。

●資料3/いろいろな苦労があったんだな

さらに、このように作られてきた白毛もち米が「絶滅の危機」にあり「幻の白毛もち米」と言われていることを知った子どもたちは、「どうして作らなくなってしまったのだろうか」という疑問を持ち追究をするなかで、次のことを明らかにしていった。

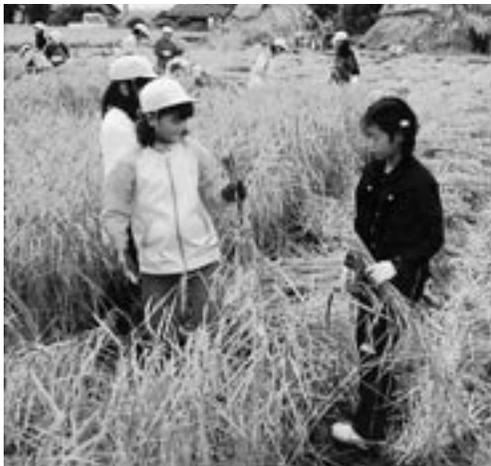
- ①主食の(たくさん作りたい)うるち米を守るために、水口に白毛もち米を植えていた。白毛もち米はおいしいので、自分の家のお祝い事に使う分として作られていた。
- ②1枚の田んぼのなかに、2種類のお米を作るということは、手で植えたり刈り取ったりしていたときには可能であった。
- ③しかし、米作りの機械化が進み、田植え、稲刈りを機械で行うようになると、1枚の田んぼに2種類のお米を作るとは、めんどう(非能率的)である。
- ④お米の品種改良が進み、冷たい水にも強いうるち米が作られるようになり、白毛もち米の役割が薄れた。
- ⑤おいしい白毛もち米ではあるが、品種改良が行われておらず、草丈(1m50cmほど)が高くて台風で倒れやすかったり、収量が少なかったりしたため、次第に作る人が減っていった。

このように、「白毛もち米をなぜ作らなくなったのか」という学習問題を追究するなかで、米作りにおける機械化・品種改良等のよさを学ぶとともに、白毛もち米が機械化によ

って絶滅の危機を迎えたという機械化のもつ別の側面にまで学習を深めていった。と同時に、こうして作り手がどんどん減って絶滅しそうになっている白毛もち米だからこそ、その危機を救うために自分たちもがんばろうと、子どもたちはますます意欲をふくらませていったのである。

#### イ 豊富な活動量を保障したことで、稲刈りのコツをつかんだ子どもたち

10月、草丈が長く、穂の重さも加わって一部の白毛もち米が倒れてしまっているのを目の当たりにして、子どもたちは、白毛もち米の作りにくさを実感した。それでも、7回におよぶ草取りや、毎日の水番など子どもたちが精魂込めて育てた白毛もち米は収穫の時期を迎えた。5アールあまりの田んぼであり、一人あたり300株以上刈り取るという活動量があったため、子どもたちは、一株刈るのに初めはザクザク…と4～5回鎌を引いていたのが、慣れてくると1回でザクッと刈り取ることができるようになっていった。また、初めのうち刈った稲を1株ごと置いていたのが、慣れてくると2～3株続けて刈り取ることもできるようになっていった。稲刈りのコツをつかんだり要領を覚えたりしていくためには、豊富な活動量を保障することが大切であるこ



●写真1／白毛もち米の稲刈り

とを子どもたちは教えてくれたのである。

初めての稲刈り、初めての白毛もち米づくり。白毛もち米を刈るとき、少々迷っていました。ここまで育てたのに、こんなにきれいになったのに、刈るなんてもったいない。でも、ここまで育てたんだから、この手で刈らないと、という二つの思いが、頭の中にぐるぐる回っていました。…

切れるといい気持ち。それに、ザクッって音は、機械でも聞こえるのかな、と思いました。ちょうどその時、となりで愛ちゃんと千波ちゃんが「この音、機械じゃ、ぜったい聞けないよね。」と言ったのを聞いて、やっぱり機械じゃ聞けないし、それに、この音がいい音、と思えるのは、ここまで一生懸命育てて、弱音をはかずに育てて、この手で刈ろうと思ったから、いい音と思えたんだと思います。しばらく、稲刈りをしていました。さすがに疲れてきてしまいました。でも、ある物で、がんばろうと気を取り直したのです。それは、冬組で作った昔の家なのです。刈った稲を置きに行くとき、あ～疲れた。いつまで続くのかなと、とてもとても冬組の人たちに失礼なことを思ってしまった。その瞬間、目の前というか、まあ顔を上げたとき、目に入った風景ですよ。それを見たら、ここまで総合で築き上げた思い出が目に見えちゃいます。なのでがんばれました。

(早苗の作文から)

#### ウ たくさん取れたことによって道具のありがたさを実感した子どもたち

10月下旬、はぞかけをして乾燥させた稲を脱穀した。古代米と言われる白毛もち米なの



●写真2／一粒一粒取れるのがおもしろい



●写真3 / 「これはすごい!」「画期的だ」

で、それまでも機械や農薬などを使わずにやってきた子どもたちは、脱穀も手作業で取りかかった。割り箸で稲穂をはさんで取ったり、ペットボトルのふたに穴を空けて、そこに稲穂を通してしごいて取ったりしていた。しかし、はぞの稲はほとんど減らなかった。「早く脱穀しないとおいしくなくなっちゃう」(宏美)「足踏み脱穀機を使えば早くできる」(美久)という声が多くなり、千歯こきや足踏み脱穀機を使った。初めて足踏み脱穀機を使った子どもたちは「うわあ、すごい。」「あつという間に取れちゃう。」と歓声をあげていた。「画期的だ」と感動の声も聞かれた。手作業を経験したからこその実感であったであろう。

脱穀の後に、粳とゴミを選別したのだが、これも子どもたちは初め、手でやることにこだわって、ざるやふるい、うちわなどを使ってゴミを取っていた。しかし、やはり手ではやりきれないことを感じた子どもたちは「昔はどうみを使っていたんだって。」(竜太)と家の人から教わってきて、学校にあるとうみを使い始めた。ゴミは飛んでいき、実のつまった粳だけが箱にたまっていくのを見て、「うわあ、すごい。よく考えたものだ。」(義久)と先人の工夫に感激の声があがった。

脱穀もゴミ取りも、子どもたちはまず自分



●写真4 / 機械ってすごいな

の手でやろうとした。これは、古代米だから、という理由と共に、対象の白毛もち米をできるだけ自分に近いところで感じたい、一粒一粒を感じたいという思いからきているのだろう。しかし、稲の量がたくさんあってやりきれないことが分ると、より便利な道具へ移っていった。これは、手から道具へ、そして機械へと進歩していった先人たちの歩みを自分たちも追体験しているように思えた。そして、先人たちの工夫や思い、知恵に心を寄せ、また、そのありがたさを実感することにつながっていったと思われる。(ちなみに、6年生のときはハーベスターを使い、機械の速さ、正確さ、ありがたさを実感し、機械が米作りをどれほど効率化したかを体感している)

工 白毛餅を食べることで活動を振り返り、やりとげた満足感を味わう子どもたち

12月20日、子どもたちが待ち望んでいた餅つきをした。愛美は「お肌がすべすべになる。」と研ぎ汁を手や頬につけたり、義久が蒸した白毛もち米を杵でつぶしながら臼のまわりを歩くと、奈美や竜太たちもうれしそうに一緒に回ったりするなど、初めての餅つきで気持ちが高ぶり、白毛もち米にかかわるすべてのことが嬉しいようであった。

餅つきでは、子どもにとっては重い杵を、友だちの「よいしょ!」の声に合わせて振り



●写真5/みんなで「よいしょ！」



●写真6/「うわっ、こんなに伸びる」

下ろした。途中、少し試食をした竜太は「4月に食べた味だ。」美久は「甘い。」とにこにこ顔だった。省悟と義久は、指についた餅を伸ばして「すごく伸びる」と感動していた。つき終わり、小さく丸めようとした宏美がポウルの中の白毛餅をちょっとだけ取ろうとしたのだが、4、50cmは伸び「すごい」と驚きの声をあげた。いただくとき「うまい。」「おいしい。」といった嬉しそうなお声がこちらから聞かれた後、子どもたちは会話もせず夢中になって食べていた。祥悟は「白毛もち米を味わいたいから。」と言って、一つ目は何もつけずに食べて「うん、甘い。」と味を確かめ、収穫の喜びをかみしめていた。

その後にかいた作文には「4月に食べたときと同じ味がしたので、ほくたちにも作れたんだなと思いました。」(省悟)「今日は、白

毛もち米と冬組の到達点にたどり着いた気がしました。みんなで作ろうと決心したとき、目標にしたところだと思えます。でも、まだまだ先は長い。」(早苗)などの感想が記された。また「これからの挑戦は、今度は自分たちで育ててきた粉で最初から育ててみたいなと思いました。それに、周りの農家の人に育ててほしいな。もっともっと白毛もちを広めたいな、と思いました。」(明)「来年は、私たちの育てた白毛もち米の粉で田植えをしたいです。それに、白毛もち米でお菓子を作りたいです。」(真実)など、これからの活動への期待も広がったようであった。

### (3)子どもの心を揺り動かす人との出会い

#### ア 絶滅の危機にある白毛もち米を復活させようとしている飯島さん

「おいしい白毛もち米を絶やしてはいけない」「白毛もち米は作りにくい、いいものを作るには手間暇がかかるんだよ」と白毛もち米への熱い思いを語り、また子どもたちが抱いた疑問について何でも答えてくださる飯島さんは特別な存在であった。優二は「よく知っているなあと思いました。肥料をいっばいまくと病気になりやすいっていうのも知らなかった。すごいなあって思った。ほくもああいうふうになりたいなと思った。天才だと思った」と感想を記した。また、田植えの時「5秒に8本くらいの速さで植えていました。さすが飯島さんだなあ」(宏美)と、その技にも驚いていた。子どもたちは、飯島さんの持つ知識や技能、白毛もち米を守ろうとする情熱などに触れ、尊敬の気持ちを抱いていった。

#### イ 白毛もち米を和菓子の材料に使っている菓匠「しみず」の清水さん

白毛もち米を和菓子に使っている店は2軒しかないことを知った子どもたちは、そのうちの1軒である清水さんを訪ねた。そしてほかのもち米よりも値段の高い白毛もち米を使

っている理由を尋ねたり、白毛もち米のおいしさを生かしたお赤飯や草餅の作り方を教わったりした。白毛もち米のこと、菓子作りのことを嬉しそうに熱く語ってくださる清水さんから子どもたちが学んだことは、それ以上のものであった。それは「素材に勝る技術なし」という信念で菓子作りをしており、白毛もち米は値段は高いけれども味がよく、香りやつやなどの点でも優れている、また「地場でとれたものを使うのはお菓子屋の使命」という考えからも、白毛もち米を使っているということを教わった。見学後、子どもたちは「地元のものを使いたい、守りたいと考えて、上伊那にしかない白毛もち米を使っているのは、冬組と似ているなと思いました。」(祥子)「中国などの安い材料ではなく、作った人が分かる安心できる素材を使いたいから、白毛もち米を使っているんだとわかりました。」(祥悟)などの感想を記している。子どもたちは、和菓子職人としての清水さんの生き様や哲学を感じ取ってきたのである。

また、清水さんとの出会いは「清水さんは、飯島さんたちと同じで、白毛もち米を絶滅させてはいけなと考えている。飯島さんと清水さんと冬組はつながっていると思いました。」(陽子)のように、生産者としての飯島さんと消費者としての清水さんがつながり、そして自分たち冬組もつながる機会となった。同時に、自分たちの活動を改めて意味づけさせてもらう機会にもなったと思われる。

## 4 成果と課題

### (1)「内から育つ」子どもを育むために重要な題材の価値

白毛もち米は、材そのものが子どもたちに働きかけてくる力があつた。具体的には、例えば脱穀をしようと考えた子どもたちは、古代米だから手でやりたいと考え(発想・構想)、割り箸や手作りの道具で脱穀をするが

(実践)、取りきれない、時間がかかりすぎる(自己評価)と考えた。そこで、足踏み脱穀機ならうまくいくだらう(構想)と考え、足踏み脱穀機を使って脱穀を行う(実践)。そして、早く脱穀ができてすごい、これは便利だ(自己評価)と自分が選んだやり方を振り返っていく。このように、白毛もち米という材の働きかけにより、子どもたちは、「発想—構想—実践—自己評価」という意欲のサイクルを自ずと回していつている。言い換えると、子どもの学びの道すじを保障することで、子どもたちは内から育っていく、そのためには題材の価値が重要である、と考察することができる。

### (2)「豊かな学びを育む」ために大切な

#### 「もの・こと・人」とのかかわり合い

5年生の理科の学習指導要領には「植物を育て、発芽、成長、結実の様子を調べ、その条件についての考えを持つようにする」という学習内容がある。社会科では「農業や水産業が・・自然環境と深いかかわりをもって営まれていることを考えるようにする」という学習内容がある。これらの学習を、子どもたちは白毛もち米作りという実際の体験を通して学ぶことで、知・情・意・体をフルに働かせて全身でとらえることができた。

また、白毛もち米をとりまく自然環境や社会環境、飯島さんや清水さんを学習の対象にし、具体的に触れることを通して自然と「農家の方の知恵ってすごいな」「千年以上も作られ続けてきた白毛もち米ってすごいな」「白毛もち米を大切に思う飯島さんや清水さんの生き方ってすてきだな」などという思いが育まれてきた。これらの感性の育ちは、子どもたちの心に、自然や社会、人に対する畏敬の念が育まれてきていると考えられる。

### (3)子どもの心にふるさとを育む学習

古くからふるさと上伊那でしか栽培をされ

ていない白毛もち米であり、しかも絶滅しそうだと聞いた子どもたちは、このおいしさをもっと広げて白毛もち米を絶滅から守りたいと考え、白毛もち米作りに挑戦した。そして、飯島さん、清水さんというふるさとを愛する人々に出会って、その生き様に触れてきた。それらは、子どもたちの心に、愛すべきふるさとを育むことにつながっていくのではないかと思われる。

#### (4)総合活動がダイナミックに広がる

##### おもしろさ

1年間白毛もち米作りを中心に総合活動を展開してきた。すると、子どもたちのなかから「今度は、自分たちで収穫したもみから白毛もち米を育ててみたい」という願いが生まれてきた。そして6年生の時には、もみの選別から始めて白毛もち米作りを行った。2年目ということもあり、PTAバザーや農協祭で白毛もち米を販売したり、甘酒とお赤飯を作ってディサービスを訪問したりするなど、子どもたちは活動の幅を広げていった。

また、教師の方も、6年生の修学旅行を、各学級総合活動に関係したコースを独自に作り(宿泊場所は東京で同じに)、冬組は弥生時代の水田跡地が発見された静岡県登呂遺跡を一つの見学地にした。そして、そこに白毛もち米が古代米かどうかをDNA鑑定をしてくださった静岡大学の佐藤洋一郎先生にきていただき「白毛もち米は熱帯ジャポニカの遺伝子を持つとても古いお米である」ことなど、直接お話をしていただいたのである。

このように、子ども自身も教師自身も意欲のサイクルを回し、求めや願いを実現しようとすることで活動や学びがダイナミックになり、さらに充実していくことができたと思われる。こうした可能性を広げるおもしろさを味わうことも「豊かな学び」の一つであろう。

#### (5)個々の学びや育ちをとらえる努力がさらに必要である ～残された課題として～

学級全体の学びの高まりを感じることはできたのだが、一人ひとりが、実際にどのように意欲のサイクルを回し、どのように学びを高めていったのかをとらえることの難しさを感じる。けれども、個々にどのような学びがあり、どのような育ちがあったのかを、教師はとらえる必要がある。特に、先に到達目標があってそれに向かって学習を進めてどうであったか、という評価ではなく、本校のように、子ども一人ひとり違う求めや願いに添って、その子どもの学びの道すじを保障していくような学習の場合、その子どもはどうであったのかをとらえる努力をもっとしていかなければならないと思われる。

#### 〈引用文献〉

- ①『生活科への道』信濃教育会出版部1989年  
12月1日発行にて復刻 淀川茂重『途上』